

2013年10月22日の「産経抄」(『産経新聞』)は、次のような書き出しで始まりました。

「あなたの頭脳と私の肉体を受け継ぐ赤ちゃんができれば、どんなにすばらしいでしょう」。美貌のダンサー、イサドラ・ダンカンの求愛の言葉に、皮肉屋で知られる劇作家、バーナード・ショーは、こう切り返した。「私の貧弱な肉体とあなたの頭脳をもった子供だったら悲惨でしょう」。

そして、「どんな赤ちゃんなのか、生まれてくるまでわからないという常識が根底にあった。その常識が覆ろうとしている。」として次のように書いています。アメリカで認められた両親の遺伝情報を解析して、生まれてくる子どもの容姿やがんなどの病気になるリスクを予測する手法が特許を取ったこと、遺伝子検査で変異が見つかった女優が癌発症のリスクを回避するために乳房切除を行ったこと、そして2013年4月から導入された日本の新型出生前診断にも触れています。アメリカで認可された遺伝情報解析の技術は、生まれてくる子どもが両親のどの部分を受け継ぐのかが、出生前にわかってしまうというものだといいます。そして、筆者は、「この技術を利用して将来、ノーベル賞級の頭脳を持ったセクシー女優さえ現れかねない。インターネットに掲載されている『優秀』な提供者の卵子や精子を選べば、自分の望み通りの赤ちゃんを産むことが可能になるからだ。そんな『デザイナーベビー』誕生につながる、と生命倫理の専門家は批判している。」「『命の選別』をめぐる議論が始まったばかりというのに、生命工学の驚くべき進歩は、新たな難題を突きつけている。」と危惧の念を著しています。

産む・生まれる、作る・授かる

人工授精という技術は、かなり以前から用いられてきました。生殖医療技術の一つで、人為的に妊娠を実現することを目的とした技術です。家畜の生産や育種、養殖漁業、希少動物の種の保存、また植物では、人工授粉などによる品種改良などがあって、野菜や果実の生産で利用されてきました。家畜については、250年ほどの歴史があるということです。

こうした人工授精の技術が不妊治療の一環として、人間に適応され、単に受胎を制御するとか中絶する、あるいは治療可能な生殖器官を治療するということとはレベルの異なる高度な生殖技術が発達することになります。人工授精は、精子の提供者が夫である場合の配偶者間人工授精(AIH:Artificial Insemination by Husband)と第三者(匿名の精子ドナー)である場合の非配偶者間人工授精(AID:Artificial Insemination by Donor)に区別されます。日本での非配偶者間人工授精は、1948年に慶應大学病院で始まり、これまでに数千~1万人以上生まれたと見られています。そして、ルイズ・ブラウン(Louise Joy Brown)さんが、1978年、世界初の「試験管ベビー」としてイギリスで誕生しました。体外受精という技術が世に知られることになった女性の誕生です。母体から採取された卵子を体外受精させ、2日半後、受精卵を母の子宮へ移し、その後は普通に成長したということです。

このように、生殖の分野における技術の進歩は著しく、取り出された卵子の保存に成功すると、精子バンクや卵子バンクなどが登場し、近年では、代理出産や生殖ツアーの是非も論議さ

れるようになってきました。法的、倫理的な視点のほかに、代理母が比較的途上国の貧しい女性たちであること、グローバル化の進展によって引き起こっている豊かな国の豊かな不妊依頼者夫婦と貧しい途上国の代理母という指摘、「借り腹」という批判、商業的代理出産の是非、複雑化する家族関係(親子関係)等々、様々な議論があります。

家族を持ちたいという、ごく当然の願いが、生殖技術を使えば叶えられるかもしれない。高度生殖補助技術は、長年不妊治療を続けてきた夫婦にとって、最後の希望となっています。

日本では、ここ何年も少子化が問題となっています。2013年6月、政府は、1人目の子どもを出産したときの女性の平均年齢が、2011年に初めて30歳を超えるなど、「晩婚化」と共に、出産の年齢が高くなる「晩産化」が進んでいると指摘した2013年の「少子化社会対策白書」を決定しました。「白書」によりますと、日本人の初婚の平均年齢は、2011年は、男性が30.7歳、女性が29.0歳で、1980年と比較して、男性で2.9歳、女性で3.8歳、高齢化が進んでいます。また、2011年、1人目の子どもを出産したときの女性の平均年齢は、前の年よりも0.2歳上昇して30.1歳となり、初めて30歳を超え、「晩婚化」と共に出産の年齢が高くなる「晩産化」が進んでいることが明らかになりました。

同時期に、NHKは、「産みたいのに産めない～卵子老化の衝撃～」という番組を放映し、次のように問題を提起しました。

不妊治療専門クリニックの数が世界一多く、体外受精の実施数も世界一、しかし、成功率は横ばいのままの日本。いつの間にか、世界一の「不妊大国」となっています。

私たちは、去年からこの「不妊」について取材を始め、さまざまな番組を放送してきました(右下リンク参照)。取材を進める中で、晩婚化・晩産化による「卵子の老化」に加え、不妊の原因の半分が男性側にあると言われる中、その治療が置き去りにされている現実も浮かび上がってきました。

今回は、医療機関と、不妊治療を経験された方への大規模アンケート調査を実施。さらに、海外の取り組みを徹底取材。これまで個人の問題ととらえられてきた不妊が、社会で向き合わなければ解決できない実態を浮き彫りにします。

(<https://www.nhk.or.jp/shutoken/funin-sp/>)

しばしば指摘されていることではありますが、「子どもを作る」という言い方を、当たり前のように使うようになった私たちの意識のあり方については、もう少し正面から考えてみる必要があるでしょう。技術は発達しましたが、その技術によって「妊娠」「出産」が目的になってしまうのではなく、その後の家族、そして何よりも子どものいのちが始まったばかりであるという事実責任を持つことが求められていると思うのです。今や「代理母のメッカ」といわれるインドのアーナンダでのこと。代理出産を依頼したあるヨーロッパの夫婦は複数の子どもを得ました。「私には何人も育てられない。この中から一人を選ぶこともできない。」生まれた子どもは、結局、施設に送られました。

身体性を失った精子、卵子、子宮、そして遺伝子情報解析。「なぜ子どもたちは生まれてくるのか？」その「問い」は、何よりも尊く意味あるものです。